
DvineSoul

日比野優和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dvine Soul

【Nコード】

N8611F

【作者名】

日比野優和

【あらすじ】

僕、天白翼には、ある秘密がある。それは、小さい頃から黒い化け物が見えること。ある日、僕が、その悪魔に襲われて絶対絶命になっていた時、突如、背中に羽を生やして空中に浮いていた少女に助けられた。その子が言うには、僕には、神様の封印解く力があるという。そして、その力を魔神という悪い神が狙っているというのだが・・・!?

序章（前書き）

ブログに書いてた小説をそのまま持って来ましたww

序章

*

ピーポーピーポー……

救急車の音が鳴り響く。

……何が起きたの？

僕は、手がかりを求めて辺りを見回した。

血、血、血

僕の目の前には血の赤しか見えない。

そして、その血の中にお父さんが横たわっていた。

小さかった僕も、その意味くらいは分かる。

「……お……お父さん……？」

小さい声を絞り出すようにして、父を呼ぶ。

・・・でも、応答は無い。

「起きてよ！・・・お父さん！・・・お父さん！・・・お父さん！・・・？」

いくら叫んでも、返事は無かった。

辺りは静まり返り、救急車の音すらもしない。

・・・そう、お父さんは死んだんだ。

僕を庇って・・・。

・・・僕のせいだ

1：現れた天使

「ガバツ!!」

勢いよく、ベッドから飛び起きる。

ハアハア、と、息が荒い。

僕の体は、汗でびっしょりぬれていた。

そして、自分がベッドの上にいることに気づく。

「・・・夢・・・?」

・・・なんだ・・・夢か・・・。

父さんが死んだあの日の夢を見るのは、何年ぶりだろ・・・。

・・・と、ここで僕は考えるのをやめた。

父さんのことを考え出したら、泣きそうになってきたから。

・・・よし、違うことを考えよう!

じゃあ、まずは自己紹介。

僕の名前はアマシロツバサ天白翼。

ごく普通の高校生……と言いたいところだけど……

……実は僕、

「普通」じゃないんだ。

それは……

「うわっ！ー！」

叫んだのは、僕。

……なぜなら、この部屋にうごめいている黒い影に気付いたから。

「魂を……魂をおくれ……」

その黒い影は、そう言いながら僕に近づいて来る。

……そう、これが僕の秘密。

僕は、得体も知れない変な物が見えるんだ。

それに、襲い掛かって来ることもある。

そうゆう時は、ただ逃げ回ってるだけだけど……。

あいつが立っているのは、ドアの真ん前。

しかも、僕の部屋は五階だ。

窓からの脱出はムリ。

「ま……まずいな……。……どうしよう……。……」

逃げ回るしか生き延びる方法が無い。

ああ、誰か……。……、誰でもいいから助けて……。……

……。……

「バタンツ！！」

その時、何かが勢いよく開く音がした。

「そのこの悪魔！！！！今すぐそこから立ち去りなさいッ！！」

僕じゃない。

女の子の声だった。

誰だ？一体どこから……。……

僕は、声のした方へと顔を向けた。

「……。……！？」

それを目にした僕は、声すらも出なかった。

驚くのも無理はない。

だって、その女の子は……

羽を生やして、空中に浮いていたんだから。

2：君はだれ？

・・・う・・・うそだろ・・・？

誰かうそだと言ってくれ！！！！

何で僕の目の前に、・・・て・・・天使（！？）がいるんだよ！！！！？？

「え・・・えつと・・・あ、あなたは・・・？」

と・・・とりあえず正体を確認だ！！

機械かなんかで飛んでるのかもしれないし・・・。

「その話は後！！あなた悪魔なんかに殺されたい訳！？」

女の子は、そう言いながら、手の中に青い光みたいなのを作っている。

「悪魔」という言葉を出された時点で、僕の考えは全否定だ。

「殺されたい？そんなことある訳ないだろっ！」

少しムツとして、僕は強気に言い返す。

「ええ。あれくらい、天使なら誰でも出来るわよ!」

ああ・・・、

「天使」とか当たり前のように使わないでくれますかね・・・。

「君って天使なんだ・・・」

「そうよ。私はリル。リル・レゼナよ。あなたは、天白翼よね?」

・・・僕は、耳を疑った。

「な・・・、何で君が僕の名前を・・・!?!?!?」

「だって翼は、天界じゃ有名なもの。あと・・・、魔界でも・・・ね」

言ってることが唐突すぎてよく分からない・・・。

いや・・・、分かりたくもない!!!

・・・なんなんだ!?

天界と魔界って・・・。

まずは、そこ説明しろよっ!!

「君、さっきから何が言いたい訳・・・?」

いても立ってもいられなくて思わず質問。

でも、返ってきた答えは信じたくもないことだった。

「翼は、魔神っていう悪い奴に殺されるかもってことよ」

・・・え？

こいつ、何食わぬ顔で言ってるけど・・・え・・・？

「・・・じよ・・・冗談？」

「そんな訳ないでしょ。ホント」

聞きたくもない一言を聞いて、僕の目の前が真っ暗になったような気がした。

3：リルの話

*

「えっと、色々分からない事があるんだけど・・・」

これ以上、訳が分からなくなると知恵熱出しそうだ・・・。

「え？・・・ああ、そういえば翼は人間だったよね」

「当たり前だッ！」

人間じゃなかったら、何なんだよ!?

僕は天使かつ!?

「間違えてもしょうがないでしょ!翼の魔力が強いんだから!」

はぁ・・・。逆切れ・・・?

「分かったから、説明・・・」

「あ、そうだったわね。何から説明すればいいの？」

リルはムカつくくらい平然とした顔でそういった。

「えっと・・・、そりゃあ、天界とか魔界とか魔神とか、なんでリルがここに来たのか・・・とか」

「分かった。じゃあ、天界から説明するよ」

「うん」

そう言って僕は頷いた。

リルの話によると、

「天界」というのは、神様とその使いの天使やユニコーンなどが住む世界らしい。

そして、

「魔界」は、魔神という魔の神と悪魔や魔女などが住んでいる世界。

僕に見えていた

「黒い影」は、悪魔。

それを使って、

「魔神」が僕を殺そうとしている、とも言っていた。

「嘘だろ・・・！？僕を殺そうとしてるって、理由は何なんだよ！？」

「・・・翼が封印を解く鍵だから・・・」

「・・・封印・・・？何の・・・？」

リルの説明は、重要な所が抜けてるから困る・・・。

「・・・神様の・・・」

「・・・え！？なんで!？」

よく、この世界が滅亡しなかったよな。

「前にね・・・」

と、リルが話し始めた。

「魔神の力が暴走したことがあったんだ」

「へえ・・・」

ここは、焦らず、適当に相槌を打っておく。

話がズレるとまずいから。

「だから、神様はみんなを守るために魔神の力と一緒に自分まで封印しちゃったの」

・・・そうゆうことか・・・。

「でも、魔神がまた暴走したらどうすんの……!?!」

「大丈夫だよ。今、魔神の力はないから。だから、翼の生命ごと力を吸い取るうとしてるんだよ」

「……そ、それってヤバいんじゃない?」

「僕、ホントに殺される訳?」

これを聞くのは怖かったけど、聞いた。

「ううん。大丈夫。翼には魔力があるし、私の守りが付くから」

「……魔力ってなんだよ……!?!」

「でも……」

僕が口を開く前に、リルが言葉を付け足す。

「神様、どこかにいつちゃって……」

そう言うリルの表情は、どこか寂しげだった。

「神様のこと、好きだったんだな」

「……うん……。大好きだった……」

見たこともない笑顔でリルは言った。

おお、以外に素直。

「僕も手伝うよ。神様探し。僕が必要なんでしょ？」

リルのあんな表情を見たら、なんか、助けてあげたくなって来た。

じゃなくても、どうせ、手伝わせるつもりだっただろうし……。

それに、このままじゃ、僕は悪魔に殺されてしまっただろう。

「あ、ありがとう」

リルが言った。

「……そうだよ……。神様を探すために翼が必要なの！どうしても……」

「うん。分かってる」

この時から僕は、前よりももっと深くこっちの世界へと足を踏み入れていた。

4：魔界へ

なんやかんやで、僕はリルに協力することになったけど……

「……で、神様探すには、何すればいいの……？」

さすがに、これを知っておかなければマズイ気がする……。

「あつ、そっか。じゃあ翼、この腕輪を試みて」

「え……？」

するとリルは、銀の腕輪を僕に差し出した。

「何コレ……」

「道しるべだよ。本来は、魔神を監視するために作られた物なんだけどね」

・・・魔神・・・？

「何で、神様探すのに魔神が出て来るの・・・？」

相変わらずの威張った態度で、リルが言った。

「だって、力が無くちゃ封印された場所からはなれられないでしょ？」

ああ、確かにそうか・・・。

封印された場所に神様がいるはずだもんな・・・。

「ふーん。あ、この腕輪って普通に腕に付ければいいの？」

「うん。ていうか、早くつけなさいよっ！」

・・・せかすな・・・。

「分かった分かった・・・」

僕が腕輪を付けたとたん、それが青い光を放ちだした。

「・・・な、なんだコレっ！！??？」

「うるさいわね。黙って見てなさいよ」

・・・はいはい・・・。

その光はやがて一本の線となり、一点だけを照らしだした。

「翼って、そうとう魔力が強いんだね。こんなに強く光るなんて・・・」

と、リル。

また

「魔力」・・・。僕って魔法が使えるのか・・・？

「・・・嘘・・・」

突然、リルが呟いた。

「どうしたの・・・？」

「何で、魔界をさしてるの・・・？」

「どっゆつこと・・・？」

いくら質問しても、リルは僕の声に気付かない。

「私は天界だとばかり・・・」

焦るリル。

でもその前に僕に状況を説明して欲しい。

「あのさ、どっゆつことなのか説明して欲しいんだけど・・・」

やっと、リルは僕の声に気付いて言った。

「つまりね、魔界は、魔神にとって有利な場所なの!!」

「……………というところ…」

「だからッ!! 思ってた以上に力を手に入れている可能性があるってことよ!!」

そんなこと言われても分かんないし……………。

やっぱ、リルって無茶苦茶だ……………。

「……………つまり、腕輪は、魔界に神様がいていつてるんだろ？」

「そっよ」

「じゃあ、魔界に行って探そう」

「……………え……………。翼、一緒に行ってくれるの？」

こうゆう時のリルは、妹みたいでかわいいんだけど……………。

僕は、コクンと頷いて、言った。

「協力するって言ったろ……………でも魔界って、魔女とか悪魔がいるけど……………、大丈夫なの……………？」

なんか怖そうだ……………。

「そっでもないわ」

サクツとリルが言った。

「……って……はあ!?!?どうゆうことだよ……!?!?

「悪魔と魔女は、魔神と契約してるから。契約してなければただの魔法使い」

「魔法使いつて敵……?」

「うん。どっちかというと味方。魔神に支配されて困ってるのよ」

「へえ。じゃあ、どうやって魔界に行くの?」

「本当にいい?当分、家族とか友達には会えないわよ?」

そのことは、なんとなく分かった。

確かに、当分会えなくなるのはつらいけど……

でも、どうしても、好奇心って奴を抑えられないんだ。

それに、これができるのは僕しかないんだろ?

「うん。いいよ。会えなくなるっていつても、これが終わればまた会えるでしょ?」

「……そう。じゃあ、道を作るからどいてて」

そう言って、リルは床に何やら黒い物を作り始めた。

「・・・何これ・・・？」

「だから、魔界と人間界を繋ぐ道よ。分かるでしょ・・・！？」
「・・・いや、分からないって・・・。」

「ほら、出来たわ。私が先に入るから、翼は私の後を付いて来て
どうやら、道を作るのは終わったようだ。」

「・・・わ・・・分かった・・・。」

僕は返事を返し、心の準備に取り掛かる。

「迷いたくなければ早く来なさい！！！」

道の中からリルの声が聞こえた。

てか、もう入ったのかよ・・・。

僕は返事もせず、黒い道へと入って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8611f/>

DvineSoul

2010年10月21日13時22分発行